湘南短期大学紀要　一八、十一－二十、二〇〇七

資料・戦時下新聞連載小説

A list of Serial storys that appeared newspapers during World War II

奥出　健
Ken Okude

解　題

昭和期の新聞連載小説についての資料や論説は、高木健夫『新聞小説史』（2巻、昭56年・11　国書刊行会）によってつとに知られている。そこでは作家別に新聞小説とのかかわりや、それを連載する背景などが述べられており、労作である。もっとも太平洋戦争勃発前後から配線までの小説についての記述はそう多くはない。ただし丹羽文雄、石川達三、吉川英治、大仏次郎については、昭和16年以降の作品資料なども提示してあり、彼らの活躍にも触れて詳細である。

本稿は高木健夫が資料整理しきれていないと考えられる太平洋戦争勃発前の昭和16年初めから19年にいたる各新聞紙上における連載小説の資料一覧である。ただし、この資料の中には講談速記の連載は含まれていない。

また当時の地方新聞の連載小説は共同配信（例えば同盟によるもの、または『福岡日日新聞』ほかの3社連合などによるものがある）によるものがほとんどであるため、地方紙の代表的例として『福岡日日新聞』と『信濃毎日新聞』を挙げた。『北海タイムス』の項目に「非重複部分のみ」と記してあるのは、当紙の連載小説のほとんどが共同配信のものであったことを意味する。他の地方紙も似たりよったりの状況である。

ところで、戦前の新聞は昭和17年10月前後に至って当局の命令によって合併させられている。その経緯については『ドキュメント昭和史3－中国侵略と国家総動員』（平凡社）に詳しいが、例えば『読売新聞』と『報知新聞』は17年8月5日より『読売報知新聞』となった。『報知新聞』の連載小説が昭和17年以後すがたを見せないのは、この合併によって『報知』自体の紙面がなくなったからである。このことからいえば、一応『読売新聞』の項目に入っている連載小説も先記以降は正しくは『読売報知新聞』としなければならない。

『都新聞』も『国民新聞』と合併した昭和17年10月1日付で『東京新聞』と名称を変更させている。また地方紙の『福岡日日新聞』は17年8月10日から『西日本新聞』となっている。

大手中央紙も、『東京日日』は『大阪毎日』と昭和18年1月1日付で名称を『毎日新聞』に統一、『東京朝日新聞』はそれらの新聞社よりも早く、昭和15年9月1日の時点で『朝日新聞』となっている。

ところで、新聞に連載小説が掲載されるにしても、発行部数によってその影響力は違う。その面からもここに当時の発行部数に関する

資料を提示しておきたい。伊藤正徳『新聞五十年史』（昭和18　鱒書房）によれば、1年で「百万連以上の紙を消費する新聞は、朝日、大毎（東日を含む）及び読売の三社だけ」であとは、「十万連以上の新聞が八社、五万連以上の新聞が四社」などとなっていたという。これらはやがて新聞用紙の配給という当局による搦手からの制御により完全に統制されていくことになる。

以上のような発刊体制への圧力だけでなく、戦前の新聞小説には内容の検閲も強く働いていて、常に制約される状況にあった。また新聞各社も「日本新聞連盟」をとおして「言論報道の統制に関し政府に対する協力」ほか当局への協力を徹底させられていた。文芸欄での統制では、徳田秋声の「縮図」（『都新聞』昭和16年6月28日～昭和16年9月15日・80回）が軍情報局の圧迫で連載打ち切りになった（頼尊清隆『ある文芸記者の回想』冬樹社・参照）ことは有名である。

また当時の連載小説を一覧して見てみると、時代を象徴するような作品が各紙に載っていることに気づく。例えばそれは『東京朝日』の岩田豊雄「海軍」、火野葦平「陸軍」であり、南方進出小説として『東京日日新聞』の井伏鱒二「花の街」、『都新聞』の中山義秀「密林」、海野十三「赤道南下」などとして現れている。

その他、この一覧によって一目瞭然の当時の新聞社と作家の相関図ができあがっていることにも気づくであろう。また小説のタイトルからも、朝刊小説と夕刊小説がもっているそれぞれの内容や雰囲気の違いというものもおのずから明白になろうし、くわえて先記、高木健夫の指摘するように、中央紙『東京朝日』と『東京日日』における、はげしい「作家の争奪戦」も浮き出てこよう。

なお、部分散逸のため、または編者自身の怠慢によって未詳にならざるを得なかった部分もある。これらは今後さらに詳細に調査していくなかで埋まっていくが、少々の時間を必要とする。今回はできあがったところまでをとりあえず発表することにした。

なお、この資料調査は平成16年～平成18年度科学研究補助金による戦前新聞文芸の調査・研究の一部分でもある。いずれさらなる資料と分析を加えて一冊とするつもりである。

なお、資料の並びは、上から

小説タイトル、作者名、連載期間、最終回数、となっている。

資料

（1）『東京朝日新聞』（のち『朝日新聞』）

（朝刊）

美しき地図	火野　葦平	昭和15年12月6日～昭和16年5月21日	165回
南の風	獅子　文六	昭和16年5月22日～昭和16年11月23日	185回
新雪	藤沢　恒夫	昭和16年11月24日～昭和17年4月28日	154回
熱風	里村　欣三	昭和17年4月29日～昭和17年6月30日	63回
海軍	岩田　豊雄	昭和17年7月1日～昭和17年12月24日	176回
運河	片岡　鉄平	昭和17年12月25日～昭和18年5月10日	135回
陸軍	火野　葦平	昭和18年5月11日～昭和19年4月25日	272回
翼	藤沢　恒夫	昭和19年4月26日～昭和19年10月24日	156回
乞食大将	大仏　次郎	昭和19年10月25日～昭和20年3月6日	？

（夕刊）

英雄峠	松前　治策	昭和15年10月13日～昭和16年2月16日	101回
梅里先生行状記	吉川　栄治	昭和16年2月18日～昭和16年8月24日	159回
高杉晋作	尾崎　士郎	昭和16年8月26日～昭和16年11月26日	77回
官軍入城	邦枝　完二	昭和16年11月27日～昭和17年3月6日	75回
呂宋助左衛門	村松　梢風	昭和17年8月18日～昭和17年9月27日	35回
有馬晴信	佐藤　春夫	昭和17年9月29日～昭和17年11月7日	33回
最上徳内	貴司　山治	昭和17年11月8日～昭和17年12月27日	40回
土浦・霞ヶ浦	岩田　豊雄	昭和18年5月20日～昭和18年7月6日	38回
千城夫人	土師　清二	昭和18年7月8日～昭和18年8月15日	33回
ラウレル弁護士	木村　毅	昭和18年9月21日～昭和18年10月15日	22回
補助翼	高田　保	昭和18年11月1日～昭和18年11月30日	23回
じやかるたをとめ	佐藤　春夫	昭和18年12月1日～昭和18年12月28日	21回
大本営	木村　毅	昭和19年1月4日～昭和19年3月4日	50回

（2）『東京日日新聞』（のち『毎日新聞』）

（朝刊）

花	吉屋　信子	昭和15年11月9日～昭和16年4月21日	162回	
純情	藤森　成吉	昭和16年4月22日～昭和16年8月31日	132回	
風樹	石川　達三	昭和16年9月1日～昭和16年12月10日	100回	
男	船橋　聖一	昭和16年12月11日～昭和17年4月17日	123回	
新しき日	吉屋　信子	昭和17年4月18日～昭和17年8月16日	121回	
花の街	井伏　鱒二	昭和17年8月17日～昭和17年10月7日	50回	
基地	北村　小松	昭和17年10月8日～昭和17年12月17日	70回	
我が家の風	堤　千代	昭和17年12月18日～昭和18年4月18日	120回	
水焔	丹羽　文雄	昭和18年4月19日～昭和18年8月28日	120回	
日常の戦ひ	石川　達三	昭和18年8月31日～昭和19年1月12日	113回	
道は近し	摂津　茂和	昭和19年1月14日～昭和19年4月21日	83回	
人間鉱脈	中野　実	昭和19年2月22日～昭和19年8月18日	103回	
剱と詩	林　房雄	昭和19年8月19日～昭和20年？		
（夕刊）				
天謀組罷通る	菊池　寛	昭和16年1月5日～昭和16年6月3日	124回	
春照る国	片岡　鉄平	昭和16年6月4日～昭和16年12月25日	170回	
阿片戦争	大仏　次郎	昭和17年1月7日～昭和17年6月10日	120回	（＊）
海援隊	浜本　浩	昭和17年6月12日～昭和17年10月13日	105回	
鷹	土師　清二	昭和17年10月15日～昭和17年12月29日	61回	
みくまり物語	大仏　次郎	昭和18年10月7日～昭和18年11月10日	26回	
龍	邦枝　完二	昭和18年12月6日～昭和19年2月14日	45回	
宇田陸戦司令官	吉川　英治	昭和19年2月14日～昭和20年3月4日	？	

（3）『読売新聞』（のち『読売報知新聞』）

（朝刊）

脂粉追放	武田　敏彦	昭和15年8月16日～昭和16年4月14日	240回
妻なれば	角田喜久雄	昭和16年4月15日～昭和16年9月25日	164回
明日の愛情	中野　実	昭和16年9月26日～昭和17年3月16日	170回
南海夫人	武田　敏彦	昭和17年3月17日～昭和17年12月31日	265回
巌	船橋　聖一	昭和18年2月3日～昭和18年7月30日	？回
航空部隊	榊山　潤	昭和18年7月31日～昭和18年12月31日	118回
今日菊	丹羽　文雄	昭和19年1月1日～昭和19年3月5日	47回
春又秋	尾崎　士郎	昭和19年7月26日～昭和19年12月2日	120回

（夕刊）

維新前夜	貴司　山治	昭和15年11月16日～昭和16年10月1日	242回
太閤記	吉川　英治	昭和15年12月21日～昭和17年7月19日	465回
河上彦斎	白井　喬二	昭和17年7月21日～昭和17年12月29日	128回
太閤記	吉川　英治	昭和18年1月1日～昭和18年11月8日	245回
海員	浜本　浩	昭和18年11月9日～昭和19年7月24日	195回
太閤記	吉川　英治	昭和19年12月5日～昭和20年8月23日	245回

（4）『報知新聞』

（朝刊）

彩る野	片岡　鉄平	昭和15年9月12日～昭和16年3月14日	182回
青春紀聞	尾崎　士郎	昭和16年3月15日～昭和16年9月10日	176回
この響き	丹羽　文雄	昭和16年9月11日～昭和17年3月22日	192回
青春草	貴司　山治	昭和17年3月23日～昭和17年8月4日	134回

（夕刊）

風雲	白井　喬二	昭和15年9月16日～昭和16年5月18日	200回
続編江戸から東京へ	矢田　挿雲	昭和16年2月25日～昭和17年8月5日	431回

花守賦	中野　実	昭和16年5月20日～昭和17年1月1日	186回
維新前夜　白鬼行	野村　胡堂	昭和17年1月6日～昭和17年4月5日	60回

（5）『国民新聞』

（朝刊）

我ら共に	寺崎　浩	昭和16年1月1日～昭和16年5月16日	132回
噂の女	真杉　静枝	昭和16年5月17日～昭和16年11月7日	172回
結婚	南川　潤	昭和16年11月9日～昭和16年12月20日	43回
青春突破	鹿島　孝二	昭和16年12月21日～昭和17年2月5日	48回
新しき神話	岡田　三郎	昭和17年2月6日～昭和17年3月21日	43回
出発	鶴田　知也	昭和17年3月22日～昭和17年5月28日	66回
美しき素顔	丸岡　明	昭和17年5月29日～昭和17年9月29日	123回

（夕刊）

颶風の門	村上　元三	昭和15年5月15日～昭和16年3月15日	250回
美丸様	平山　蘆江	昭和16年3月16日～昭和16年11月23日	208回
大久保彦左衛門	琴弾　松男	昭和16年3月21日～昭和17年10月1日	469回

（6）『都新聞』（のち『東京新聞』）

（朝刊）

花は偽らず	藤沢　恒夫	昭和15年7月7日～昭和16年2月10日	216回
道	阿部　知二	昭和15年12月20日～昭和16年6月27日	188回
川歌	林　芙美子	昭和16年2月11日～昭和16年9月1日	202回
縮図	徳田　秋声	昭和16年6月28日～昭和16年9月15日	80回
臣牛	長谷川　伸	昭和16年9月2日～昭和16年9月30日	29回
虎彦龍彦	坪田　譲二	昭和16年9月16日～昭和17年2月3日	140回
密林	中山　義秀	昭和17年2月4日～昭和17年6月8日	121回

赤道南下	海野　十三	昭和17年6月9日～昭和17年8月22日	75回
太陽の子	藤森　成吉	昭和17年8月23日～昭和18年5月5日	215回
人生劇場　遠征編	尾崎　士郎	昭和18年5月6日～昭和18年10月28日	171回
東橋新誌	高見　順	昭和18年10月30日～昭和19年4月6日	140回
星章	上田　広	昭和19年4月7日～昭和19年6月27日	62回
樹陰	久保田万太郎	昭和19年6月28日～	
（夕刊）			
国姓爺	長谷川　伸	昭和17年1月6日～昭和17年10月1日	215回
日輪の子	藤森　成吉	昭和17年10月2日～昭和18年2月	？
灯台	村松　梢風	昭和18年2月17日～昭和18年11月	？
御邑士族	山岡　壮八	昭和18年11月18日～昭和19年3月4日	83回
（7）『中外商業新報』			
（朝刊）			
礎の人々	武田麟太郎	昭和15年10月12日～昭和16年6月25日	255回
美しき樹海	広津　和郎	昭和16年6月26日～昭和16年10月12日	109回
勝安房守	子母沢　寛	昭和16年10月14日～昭和17年8月31日	320回（＊＊）
（夕刊）			
三国志	吉川　英治	昭和14年8月26日～昭和17年8月29日	899回
（8）『福岡日日新聞』			
（朝刊）			
三人姉妹	丹羽　文雄	昭和16年1月1日～昭和16年8月7日	213回
春の原始林	尾崎　士郎	昭和16年8月8日～昭和16年11月29日	112回
健康な春	広津　和郎	昭和16年11月30日～昭和17年5月27日	171回
田園日記	林　芙美子	昭和17年5月28日～昭和17年11月9日	160回
パゴダの国	榊山　潤	昭和17年11月9日～昭和18年3月29日	140回

故郷	阿部　知二	昭和18年3月30日～昭和18年6月28日	90回
新草	船橋　聖一	昭和18年6月29日～昭和18年11月30日	136回
生活と文化	丹羽　文雄	昭和18年12月1日～昭和19年3月5日	66回
伊豆の代官	浜本　浩	昭和19年4月22日～昭和19年9月15日	135回
（夕刊）			
時代の旗風	海音寺潮五郎	昭和16年1月1日～昭和16年8月14日	187回
瑞穂太平記一	白井　喬二	昭和16年8月15日～昭和17年12月4日	387回
源氏篇ほか			
愛火	大仏　次郎	昭和17年12月5日～昭和18年8月6日	200回
雲悠々	海音寺潮五郎	昭和18年8月7日～昭和19年1月22日	136回
中津隊	火野　葦平	昭和19年1月24日～昭和19年4月21日	70回
（9）『信濃毎日新聞』			
（朝刊）			
汝を愛す	大鹿　卓	昭和15年12月21日～昭和16年4月13日	112回
軍人村長	冨沢有為夫	昭和16年4月14日～昭和16年10月2日	170回
風さけぶ	榊山　潤	昭和16年10月3日～昭和17年1月11日	99回
雲を追ふ人	浅原　六朗	昭和17年10月13日～昭和17年7月24日	190回
遥なる星	鈴木彦次郎	昭和17年7月25日～昭和18年2月11日	198回
山国	坪田　譲治	昭和18年2月12日～昭和18年5月23日	100回
花咲く監視哨	河内　仙介	昭和18年5月25日～昭和18年8月4日	65回
無敵空軍	木村　毅	昭和18年7月1日～昭和18年11月30日	152回
鉄の歌	大江　賢次	昭和18年12月1日～昭和19年3月20日	110回
大空へ	片岡　鉄平	昭和19年7月30日～昭和19年10月19日	81回
主力艦隊出動	寺崎　浩	昭和19年10月21日～昭和20年2月	？
（夕刊）			
八幡船	下村　悦夫	昭和15年7月7日～昭和16年1月26日	167回

婦道太平記	村松　梢風	昭和18年8月5日～昭和19年3月1日	169回
ゆうびん	土師　清二	昭和19年3月2日～昭和19年7月29日	120回

（10）『大陸新報』

（朝刊）

見えぬ閃光	北村　小松	昭和15年6月22日～昭和16年2月7日	152回
海に鳴る侍	山本周五郎	昭和15年8月7日～昭和16年2月14日	157回
風も緑に	日比野士朗	昭和16年2月18日～昭和16年7月31日	157回
黄鳥	小田　嶽夫	昭和16年2月18日～昭和16年7月31日	114回
生命の鳶	多田　裕計	昭和16年12月1日～昭和17年1月31日	62回
方々にゐる	草野　心平	昭和17年2月1日～昭和17年3月30日	54回
山河一望	片岡　鉄平	昭和17年4月1日～昭和17年7月22日	111回
結婚衣裳	中山　義秀	昭和17年7月23日～昭和18年1月29日	151回
郷愁	田畑修一郎	昭和18年1月30日～昭和18年4月6日	66回
緑地帯	石上玄一郎	昭和18年4月7日～昭和18年7月24日	76回
南十字星	大江　賢次	昭和18年8月1日～昭和19年3月3日	210回
銀座近情	高見　順	昭和19年3月4日～昭和19年7月9日	95回
鄭成巧	岩崎　栄一	昭和19年8月1日～　？	

（夕刊）

岸田吟香	岩崎　栄	昭和15年10月15日～昭和16年3月29日	132回
根津一	木村　荘十	昭和16年4月1日～昭和16年8月27日	121回
続岸田吟香	岩崎　栄	昭和16年8月28日～昭和16年11月27日	73回
棉鈴	井上　佶	昭和16年12月2日～昭和16年12月27日	11回
先駆者の道	国枝　史郎	昭和17年1月6日～昭和17年6月11日	130回
青木宣純	佐藤　垢石	昭和17年6月12日～昭和17年11月25日	121回
宮崎滔天	新田　潤	昭和17年11月26日～昭和18年5月20日	135回

(11)『北海タイムス』(非重複部分のみ)

(夕刊)

北方の先覚	高倉新一郎	昭和18年4月12日～昭和18年8月27日	99回
鷲	北村　小松	昭和18年9月7日～昭和18年12月20日	70回
山吹	室生　犀星	昭和19年2月10日～　？	

注

(＊)「阿片戦争」　大仏次郎・昭和17年1月7日～昭和17年6月10日・120回は、高木健夫『新聞小説史』では、昭和17年1月6日～昭和17年4月3日・60回と記されている。

(＊＊)「勝安房守」　子母沢寛・昭和16年10月14日～昭和17年8月31日・320回は、高木健夫『新聞小説史』では昭和16年10月14日～昭和17年10月31日・380回と記されている。